

加島屋のビジネスモデル

社会貢献と本願寺門徒としての活動

加島屋と西本願寺

大坂でも有数の豪商となった加島屋は、積極的に社会貢献に取り組んでいた。しかし、豪商として有名になる以前から熱心に取り組んでいたものもあった。それが西本願寺との関係に基づいた、学問に対する支援活動である。

加島屋は、江戸期を通じて西本願寺の有力な門徒であった。最近になって、同寺の古文書の中から、初代・^{まさのり}正教の名（「加島屋教西」、教西は初代久右衛門の法名）が記された史料が発見された。時は1670（寛文10）年。加島屋が津和野藩との融資契約を交わす百年も前のことであり、少なくとも、初代・正教の晩年には、西本願寺と深い関わりがあったのである（本願寺史料研究所・大喜直彦氏のご教示による）。

加島屋と^{がくりん}学林

さて、西本願寺には、1639（寛永16）年に設けられた「^{がくりょう}学寮」という学問のための施設があった。学寮は1655（明暦元）年に幕府の命で取り壊されるが、あらたに「学林」と名を変えて再出発する。

1751（宝暦元）年、学林は現在の京都市・西洞院通周辺に移転するが、その土地代・校舎建設費の寄進を行ったのが加島屋広岡家であると、学林の史料

に記されている。四代・^{まさのぶ}正喜（法名：喜西）の代のことであり、彼が学林の^{のうけ}能化（学林の最高位）^{ぎきょう}義教に深く帰依したことが背景にあると考えられている。

また、六代・^{まさよし}正誠が当主だった1784（天明4）年には、京都西洞院にあった加島屋の別邸が、土地・屋敷とも学林に寄進されている。この場所は、現在の西洞院正面付近（京都市下京区）と想定される。



加島屋が寄進したとされる、別邸が存在した周辺（西洞院正面）

その後も加島屋は折に触れて学林に援助を行い、これに感謝した学林は、加島屋の歴代当主やその妻のための特別な供養を頻繁に行っている。明治の初年まで、加島屋は「学林の最大の外護者」

として強力な援助を続けたのである。

この学林はその後、移転や組織改編・合併などを繰り返しながら、現在も四年制の大学として多くの若者が学ぶ場となっている。それが現在の龍谷大学である(『龍谷大学三百五十年史』、「諸件遺状留」)。

200年の社会貢献がもたらしたもの

この加島屋と西本願寺との長きにわたる関係は、意外な縁を持ち込む結果となる。1899(明治32)年、浄土真宗各派の資金拠出により創業された生命保険会社である真宗生命が経営に行き詰った際、その経営援助を真っ先に打診されたのが、長らく西本願寺の有力な門徒であり、当時加島銀行や広岡商店などの近代化企業を有していた加島屋だった。

九代・正秋とともに経営を担っていた広岡浅子の決断で、加島屋は真宗生命の経営権を取得し朝日生命(現在の朝日生命とは異なる)と改称、傘下の企業とする。その後、1902(明治35)年、朝日生命が護国生命・北海生命との三社合併により誕生したのが、現在の大同生命である。

大同生命創業の背景には、江戸期の初代・加島屋久右衛門から始まる社会貢献の精神があったと言っても過言ではないだろう。

大同生命HPより

<http://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/kajimaya/02-03.html>